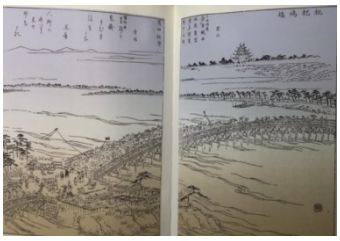
「庄内川の花見」と枇杷島

名古屋都市センター『アーバン・アドバンス』67 号「なごやのまち今昔 庄内川の花見」に注目した。江戸時代の桜の名所といえば堀川日置橋付近。庄内川堤も名所とは。庄内川堤のまち枇杷島に興味をもった。風媒社『尾張名所図会』、2006 年から。

―枇杷島は 1601 年（慶長 6 年）に美濃路が整備されて以来、名古屋から中山道へ至る街道沿いの町として発展を遂げてきた。しかし、単に街道沿いの町というだけではなく、名古屋城下の市場町として栄えてきた。数十年前まで、枇杷島は名古屋の台所とも呼ばれていた。江戸時代から戦後しばらくの間、枇杷島に青物市場があったからだ。



枇杷島という地名だけで考えると、ここにかつて島があったのではないかと推察される。確かに『図会』の枇杷島橋の絵には島が描かれ、島を利用して橋が渡されている。やはり島はあったようだ。島には茶店のようなものもあるから、それなりの大きさの島であったのだろう。

枇杷島の上流には洗堰がある。庄内川が増水したときに、水が城下とは反対の側へ溢れるようにして、城下を洪水被害から守るためであった。ただし、城下は守られるが対岸の一帯は洪水被害に遭うことになる。

この付近の川底は、上流から運ばれた土砂がたい積し、天井川となっている。一度堤防が決壊したならば、大きな被害をもたらす。そんな川の中に島があると水路を狭め、水流は強くなる。破堤の危険が高まる。そこで 1958 年（昭和 33 年）におこなわれた河川改修のときに島は取り除かれた。

この島には枇杷の木がたくさん生えていたという。それが枇杷島の由来だとされるが、もうひとつ地名の由来となった悲しい恋の伝説が残されている。太政大臣藤原師長が平清盛によって井戸田村（現在の名古屋市瑞穂区）に配流された。師長は枇杷の名人でもあった。都を偲び琵琶を奏でていたが、やがて村長の娘と恋に落ちた。だが、別れのときはすぐに来た。井戸田村に配流された翌年、師長は許されて都に戻ることになった。

娘は師長を見送り、ついに枇杷島まで来た。師長は別れに際し、愛用の琵琶を娘に預けた。しかし、娘はこの世をはかなみ、近くの池（川の淵ともいわれている）に身を投じた。土地のものが娘を哀れみこの地に葬った。これが枇杷島の由来だという。

（2017 年 4 月 4 日）